

セネガルにおける農業開発と農村社会に関する社会経済学的研究

平成 16 年入学

派遣先国：セネガル共和国

派遣先機関：セネガル河流域整備開発公社

高橋 隆太

キーワード：農村開発，参加型開発，開発援助，農民組合，社会関係

派遣先機関の概要

セネガル河流域整備開発公社（以下、セネガル河開発公社と略）は、1965年に設立され、主にセネガル河下流域の水田開発を中心とした、セネガル河流域での農業開発、農業投入財や農業機械などの確保や管理、農作業の指示、農作物の市場統制を行なっていた。しかしその結果、セネガル河開発公社は多大な債務を抱え、1980年以降の構造調整政策によって、公社のそれまでの役割は剥奪されることとなった。ただ、公社自体が解体されるわけではなく、それまでの公社名を残したままで、セネガル河流域の農業調査・研究や、諸外国からの援助の仲介が主な役割となった。当機関の調査・研究は、この地域の主要な農産物であるコメやトマト、オニオンが中心で、これらの生産と流通、市場の調査や、農学的な研究を行なっている。また、諸外国の政府援助機関や NGO がセネガル河流域での援助プロジェクトを立ち上げる場合、セネガル河開発公社がそれらの調査・計画・実施を支援している。



(写真1) トマトに水をやる農民たち

派遣先でインターンシップを希望した動機と、派遣前に設定した目標について

当機関でのインターンシップを希望した動機は、①派遣先であるセネガル河開発公社は、40年以上のセネガル河流域における調査・研究の蓄積があり、セネガル政府や当機関による独立以降の統計資料や文献資料などがそろっていること、②当機関には農学や経済学をはじめとする様々な分野を専門とした研究者が多数おり、彼らと意見や情報を交換することが可能であること、③現在進行または計画されて

いる諸外国の援助プロジェクトにたずさわっていることである。

インターシップをとおして当機関の研究者と議論することで、私の農村での現地調査だけでなく、セネガルおよびセネガル河流域における社会経済構造の動向、農産物の生産構造、開発政策の変遷、諸外国の開発援助プロジェクトの動向を加味した、より包括的で実践的な農村開発の分析を行なうことを目標とした。

派遣期間中の活動について

上記の動機と目標をもとに、派遣期間中に行なった活動は以下の4点である。①当機関が所蔵しているセネガル政府や当機関が発行した文書や統計資料の収集にあたった。当機関はセネガル河流域における長年の開発の歴史や農業調査・研究の蓄積がある。そのため私は、セネガル河流域における植民地以降の稲作やその他の農業の展開、独立以降の政治経済状況の展開に関する文書や資料、統計を収集することに努めた。

②現在進行している、あるいは計画されている諸外国による援助プロジェクトについての情報を収集した。当機関は、セネガル河流域の農業調査や諸外国援助の仲介を行なっている。資料によるこれらの情報を収集するとともに、諸外国の援助団体の視察や公社の会議に参加することで、公社や援助団体と、農民のやり取りを観察し、農民や援助団体と議論を交わした。これらにより、開発援助の現実やセネガルにおける貧困削減という現代的諸問題を浮き彫りにすることを目指した。

③当機関において、私の研究を紹介し、セネガル河における農村開発や農業について議論を行なった。2004年7月から2005年2月まで行なった前回の現地調査をもとに、私の農村開発についての研究を紹介し、特に調査地における農村開発の展開と、セネガルにおける農業開発政策の動向やセネガル河流域における社会経済構造の展開との関わりについて意見を求めた。それにより、これらの関わりについての分析の参考にするとともに、関連する資料の提供を求めた。

④当機関の研究者が私の調査地を訪問した際に、調査地の社会経済や、他村のそれとの類似点および相違点について意見や情報を交換した。当機関はセネガル河流域全域において調査・研究しており、この地域における農村社会についても、高い見識がある。彼らとともに数箇所の農村を訪問し、地域社会への洞察を深めることができた。



(写真1) 公社の会議に参加する農民たち



(写真2) 村を視察する NGO と開発公社職員

派遣先で印象に残った体験や経験

インターシップによって、農民からの意見を求める、いわゆる住民参加型の開発手法にもとづいた公社の会議や援助団体の視察に参加することができた。公社側は、すでにプロジェクトの大枠は決定しているが、もし農民側から参考になる意見があれば多少汲み込む可能性もあるといった程度にすぎず、農民の声を吸い上げるための会議というよりはむしろ、公社側の意見を農民に説明するようなトップダウン式の、参加型開発というための形式的な会議ではなかったかという印象を受けた。

このような参加型開発の問題点を指摘する研究者や実務家は少なくないが、農民の声をどのように聞けば良いのかは、公社のスタッフにとっても困難な問題なのである。農村の生業基盤や地域の社会関係を理解することで、今までとは違う開発実践が可能になるのかもしれない。今回のインターンシップ経験を生かして、地域農民や公社のスタッフと一緒に考えてゆきたい。

目標の達成度や反省点について

インターシップとして受け入れてもらうことで、当機関において私の議論を紹介し、研究者と議論する機会を得られたばかりでなく、インターシップの成果報告書を当機関から発行する約束を得ることができた。当機関が、インターシップ生として上記の私の活動に融通を利かせてくれたことにより、セネガルにおける農業政策と調査地域の農業開発の関連や、セネガル河流域における調査村以外の村での開発状況や歴史、互酬性や平等性といった農村の社会・文化的な側面を議論することが可能となった。また、当機関だけでなくその他の機関においても、当機関のインターシップ生として、資料提供等の協力をしてもらい、彼らと意見や情報を交換することもできた。

しかし、派遣期間の最後にインターシップの報告会を開催する手筈を整えていたものの、時間の関係上、実現することができなかった。次回派遣される際には、当機関だけでなく、他の機関の研究者も招いて、報告会を開催したいと考えている。